

# 2

## 暮ら し

本章では、加美町の「暮らし」を扱います。前章とは違い、子供の頃の遊びや学生時代の様子、生活の知恵、お祭りや地域のイベントなど、まちの様々な様子が見えてきます。加美町で暮らす様々な年代のひとのお話を通して、暮らしの変化を読み解いていきましょう。



# 加美町の暮らし

戦後の復興期から高度経済を経て、加美町の生活は大きく変化した。近年では、バッハホールなどの公共施設が充実して、風景も一変し、人との関わり方も少しづつ変わってきた。そんな中、昔の共同体や習慣を懐かしむ声もあるようだ。

## 昭和前期（～1940年代）

### 質素でも充実した暮らし

昭和前期の初めは、まだ電気すらない生活だった。靴などの生活用品も今とは随分違うもので、それに伴って生業も違っていた。また川での魚捕りは、みなやどじょうなどがそのまま食糧になり、生活の一 部を担っていたと考えられる。

『下駄屋さんはうちの近くにあるんです。下駄つて「歯」を入れ替えて、それをまた履くんんだけど、鼻緒は自分で作つたの。そういう作業をしてもらつているのを、飽きなくじ一つと見てるんです。何にも言わなくて見せてくれて、下駄屋さんは新しくてまちに入つてきて、私が小学生のときやつと



電気が付きました。』（宮崎・90代）

『小川には魚がたくさんいましたよ。ふなとかじじょう。あと田んぼにも。「どんじょど」って言う罠を仕掛けておいて、私は早起きだから朝捕りに行くの。夜はおかげにして、タンパク源にしていたの。』（宮崎・90代）

『小学校のそばにある、股川っていう川があるんだけど、ここに小学生が来てね、水泳したの。小学校の近くには志田江川っていうのもあって、そこで水泳が上手になると、今度は鳴瀬川で泳ぐ

『（中新田・70代）

車も普及していなかつたので、車の貸し借りで小さなコミュニティが生まれていた。

『昔は火事になつても車がなかつたから、消防団は車を持つて車に乗せてもらっていた。そのうち、うちのじいさんが車の免許を取つたら、他の村で火事があつたら必ず団長さんを乗せていくなくてはいけなかつた。一番大変だつたのは夕方の配達が忙しい時に火事が起つた場合だね。』（宮崎・60代）

『私が子供の頃の中新田小学校には、たくさん生徒がいました。ひとつ学年で1クラス40人、それが6組くらいありましたからね。それから当時の中新田中学校は木造で、終戦後に建つたものです。よく自転車とかで通つてました。』（中新田・60代）

『夏休みになると小学校では、「子供会」というのがあつて、自分たちの住んでる道路、昔の347号道路を掃除して、ラジオ体操して解散つてさ。』

『隣近所の子供たちだけで、5、6人ぐらいで木に櫓を組んで遊んだよね。木の上だから風もくるし、葉っぱで日陰も作れるし。そういう場所で宿題をやつたよね。親たちが入らなくとも、子供同士でよくそういうことをやつた気がするね。』（中新田・70代）

子供たちは縄跳びやゴム跳び、お手玉やおはじき、そしてキヤッチボールなど、外で思いつきり遊んでいたようだ。砂利道の道路や畑、神社などさまざま

当時の加美町には子供たちがたくさんいて、学校も賑わっていたという。町では「子供会」を始めとして子供たちの活発な活動が行われていた。

な場所が子供にとつての遊び場だった。

また、立派な遊び道具はなかつたため、スケート靴を作つたり、桑の枝やボール紙を使って遊び道具を作るなど、物が豊かでない時代ならではの工夫した遊びが見られた。

『今の子はゲームとかするけど、昔はそんなもの無かつたから、みんなで縄跳びやゴム飛び、お手玉をしたり、おはじきをしたね。ゴム飛びは、両端でゴムを持つてる子がいてそれを飛ぶの。だんだん高さを上げていって、引っかかる子がいると選手交代。今度は負けた子がゴムを持つる』（小野田・80代）

『家の前でキヤツチボールをやつていた。コントロールは良かつたんだけども時々ガラスを割つたりもしてね。でもみんな子供だからって許してくれたりした。』（中新田・60代）

『砂利道で軟式テニスの柔らかいボールを使つて、野球なんかして遊んだもんだけね。俺たちの頃は、道路が遊び場だつた。だから自分たちで掃除もしたよ。子供会のひとつの事業だつたからね。』（中新田・70代）

『やつぱり、スケート道具は欲しかつた。道具がなくて仕方がないから、下駄の底に、金属をつけたりやすくなつたりね。今は立派なのがあるけど、あとは、着る物が欲しかつた。みんなお下がりだつたしな、おれたちの頃は。』（中新田・70代）

『戦争ごつことかして遊んだね。5、6人でボール紙かブリキで鍔を作り、加工しやすい桑の枝で刀を作つて、やー、やーつて遊んだね。ガキ大将がいて、遊びのルールや色んなことを教えてくれた。家の裏庭や、桑畠、神社仏閣などで遊んだね。お寺の近くの連中は鐘楼に登つたりして遊んだりしたね。』（中新田・80代）

『小さい子は映画館に入つちゃだめで、毛布みたに忍び込む「ペろんこ」や、子供心に恐ろしかつた虎舞いのお話などが語られた。

『小さい子は映画館に入つちゃだめで、毛布みたいなのに隠れて無賃で映画館に入つた。確か無賃入場の事を「ペろんこ」つていつたんだよ。昔の演劇場の中新田座で、たくさん「ペろんこ」したね。中新田座の食堂の近くにはトイレがあつたんだから、トイレの匂いがしたのを憶えているね。』（中新田・80代）

『戦争が近づいてくると、生活は一変した。外で遊びた子供たちも、だんだん変わっていく様子を感じていたのだろう。学校では教科書もノートもなく、お下がりや代用品で対処していた。また中学生は学校で勤労奉仕をさせられるなど、戦時中の生活の辛さが伺えた。』



『やっぱり、子供の頃は虎舞がおつかなかつたね。あれは舞い手が小学生で、一日中家を回つて、火伏せと家内安全とを祈願して、ご祝儀を頂くとい

うものなんだ。舞い手は、小学5年生から中学2年生くらいまで対象に募集するわけ。応募者も沢山いるから、オーディション、選考試験もあつた。

『戦争のときは、尋常小学校の授業料が徴収されていたし、生活が大変だった。戦争中は教科書もノートもなくて、習字の時間だって新聞紙に書い

（中新田・60代）

『昭和12年からはラジオが普及したんだ。支那事変がおきて軍事色が強くなつてくると、子供の遊びにも戦争関係が多くなつてきたね。その当時の小学生のなりたいものは陸軍大将や海軍大将とかだつた。中学生の年齢になると、軍隊に行く為の幼年学校があつて、それが将校になる近道だつたね。私が中学校二年生の頃に終戦になつたけど、もつと続いてたら幼年学校に行つていたんじやないですかね。私も含めて当時の子供たちは、軍服とか馬にのつた姿とかに憧れていたね。』

ていたんだもの。道具を姉ちゃんに借りたり、本などは使い込んでへりがぼろぼろになつてた。」  
（小野田・80代）

『私が中学校1年生の頃は、遊ぶよりも学校に残つて勤労奉仕させられたね。みんな戦地に行つちやつて働き手がないもので。中学校2年生のときは終戦の年なんですよ。そのときは開墾や、山に行つて蕎麦を植えたりしたね。』  
（中新田・80代）

『農家は春作業と秋作業つていうのが非常に忙しかつたから、入学していない子供たちを学校に連れていくつて、教室やら校庭やらで遊ばせてた。それから、昔は田植え休みといつて、1週間から10日くらいの休みがあつたんだよ。』  
（中新田・70代）

## 昭和中期（1950～60年代）

### 地域コミュニティにより支えられた生活

昭和中期の農業は、生活と農業の密接な関わりが見受けられた。戦後、食糧などがまだ安定していく中、農業が生活の基盤を支えていた。田植えの時期は大人たちの共同作業だけではなく、学校が「田植え休み」となり、子供たちはあらゆる手伝いをするのが当たり前だった。このように農作業の手伝いを通じて地域の住民同士でつながる様子や、小屋や植え上げの休憩時間楽しむ様子など、当時の充実した思い出が語られている。

『昔は田植えが始まると学校が休みになつたぐらいだから、小さい子供のために田植えの期間の一週間くらいだけ、保育所ができた。他の家を手伝つたり、自分の家も手伝つてもらつたりもしたね。』  
『田植えの前には、田んぼがどろどろになるくらい耕すの。「田んぼをぶつ」つていうのだけれど。今でこそ機械でやつているけど、昔は牛がやつてた。「鼻取り（牛馬の鼻を取つてうまく誘導すること）」と言つて、それができる子は優秀な子だつた。小学校高学年くらいになると、みんなこれが

できるようになる。』（小野田・60代）

トラン）に行つたりだね。時代が変わつて来ている。』（小野田・60代）

『代掻き（シロカキ）』ってやつ分かる？ 田んぼの中を、馬や牛に真っすぐ歩かせるために、鼻のところにカギをつけて引っ張つて、田んぼを耕したわけさ。親父たちは鋤（スキ）を使って田を起こしたり、田植えするのに水を張つたり…。仕上げるまでに、同じ田んぼに3回は入つたな。』

『畑では大根や白菜の収穫時期になると手伝つたね。夏の暑いときに、じやがいも掘りもした。子供の頃は、あらゆる農作業の手伝いをするのがあたりまえだったよね。そうするとたまに小遣いを貰つたり、ほしいものを買ってもらえた。』

（中新田・70代）

『田植えの時に苗を投げて渡してやる、苗運びというのがあつたね。楽しかったよ。そして、10時と3時には「小屋」っていうおやつの時間になる。お金持ちの家ではあんぱんが出た。それで、田植えの最終日、「植え上げ」っていうんだけれど、その日にはお餅がでた。だから、子供の頃は「植え上げ」を楽しみにしていた。』

『今では「小屋」っていうと、コンビニで買うものになつてしまつた。あと「植え上げ」も、今まで薬師の湯に行つてお食事したりブナ林（レス

戦後こそ、大衆の娯楽が必要とされたのだろう。各地区でお祭りや町民運動会などのイベントが賑わつていたようだ。小野田では秋祭りの仮装行列や歌謡ショー、宮崎ではお神輿や天狗が通り、各家で獅子舞が踊る熊野神社のお祭りが行われていた。またお祭りの時の出店には、今でも深い思い出があるようだ。

『昔のお盆の時期には、迎え火や送り火といつて、藁床に火を焚いたんですよ。その時期には、各地区で盆踊りも賑わつていて、みんなで櫓を組んだよ。町民運動会もあつたから、もうドンチャカドンチャカでした。』（中新田・60代）

『小学校では行政区対抗の運動会があつた。これは賑やかだったね。家族全員で弁当を持って行き、出店が出て、ぱつたん（めんこ）とか、ビー玉、水アメ、わたあめ、「どん」っていう米とか豆とか砂糖の入つたお菓子、あとはキャンディなどを売つていた。』（宮崎・70代）

『秋祭りは商店街の人は仮装行列してあとは歌謡

シヨー。50年前の話ね。』（小野田・60代）

『熊野神社の獅子舞では、通りにお神輿やかぶり物をした人が通つた。獅子舞は、今でも4月12日に来るよ。そして夏は盆踊りをやつて、秋祭りは商店街の人々が仮装行列したり、歌謡シヨーをやつた。50年前の話だね。』（小野田・60代）

『熊野神社の春祭りでは、獅子舞が出るんだ。山の神って言う、獅子舞を茶化す役がいるんだけど、それを獅子舞が退治するっていう舞いなんだ。各地域の子供たちは、獅子舞が通る道に新しい砂を撒いていく役などをやつていた。当時は、地区的お祭りと子供たちが一体になつていたね。』

（宮崎・60代）

『昭和40年の少し前あたりに子供たちがお祭りで食べるものというと、今でも味を思い出せるものがあります。スルメイカを水で少し柔らかくして、これを火にかけて、そして醤油と砂糖を混ぜたたれをつけて、露店で売っていたんです。あとはラムネや紙芝居もあつたなあ。』  
『紙芝居は、水飴とかスルメを、お金を出して買わないと見られないんですよ。』（中新田・70代）

『お小遣いは、俺たちの家だと30円から50円だな。でも水飴とか、綿菓子とか買えたんだな。』  
『こんにゃくに味噌。この辺でおでんって言つたらこれが主流だったね。今じゃ大根とか色々入ってるじゃない。じやなくて味噌おでんがおでんだと思ってたね。こんにゃくに味噌つけた、田楽味噌みたいなのが、おでんだと思つてた人が結構いる。』（宮崎・50代）

『私が子供のとき、夏には地蔵通りに夜店が出た。ガス灯の明かりで、お祭りをしたね。ガス灯の匂い：カーバイトかな、あの匂いがすごく強烈に残つてゐるなあ。』（中新田・60代）

また演劇や歌などを披露する「座」や映画館の様子、子供の頃に忍び込んで、無賃で鑑賞した「ぺろんこぺろんこ」の思い出などが語られた。また映画館だけでなく、東小野田小学校の体育館でも映写機を使って映画などが上映されていた。映画やサークルは学校の授業の一貫として観に行くこともあったようだ。

『私が物心ついた頃には、この町でも新しいスクリーンを取り付けた映画館が2軒ありましたよ。あと、昔からの芸能をやる「座」っていうのがあつ

たんですよ。そこでもね、演劇とか歌手が歌いに来る以外に、映画を見る事もあったのね。だから盛んだった頃は、映画が見れるところは全部で3軒あったのかな。』（中新田・70代）

『小学校の頃は、中新田の町によく行つていましたね。そして一日中、映画館にいるんです。朝に送つてもらつて、ずっといるんですよ。迎えに来てもらうまで、何度も同じ映画を観るんです。』（中新田・60代）

『昔、映画を観たくて建物の壊れているところから、お金払わないで観てた。「ぺろんこぺろんこ」つていう。』

『映画は、東小野田小学校の体育館で映写機使って映画館よりも安く映画を観ていた。時代劇とか。家族全員で見たのは良く覚えている。』（小野田・60代）

『東小野田小学校の体育館で映写機使つて映画館よりも安く映画を観てた。』（小野田・70代）

どんな時代でも、子供たちは工夫をして遊んだようだ。当時の子供たちは、スキーや凧など遊び道具を自ら作つて遊んでいた。また、子供たちのいたず

らはある程度容認されていたので、自由にいろいろな所で遊んでいたという。神社や寺の境内、原っぱや空き地で野球をやつたり、堤防でソリを使って遊んだりと、子供たちが遊ぶ姿が町中で見られた。

『物心ついたころは、まだ終戦直後だったから、遊び道具はなにもなかつた。板を削つて前の方を少しおらせて、鼻緒をつけてスキーの道具を作つた。竹を割つて、竹の先を火で以つて熱を加えて少し曲げて、鼻緒をつけてスキー板にする場合もあつた。』

『昔は町にたくさんあつたりんごの箱を、ソリにしたことわざもあつた。昔は、りんごを木の箱に入れて、米のぬかを入れたんです。非常に手先の器用な人は、いろんな板切れや棒切れを集めてきて、それを削つてハンドルまで作つてましたね。』

『他に手作りのものといえば、凧ですね。竹藪から竹を切つてきて、細く裂いて、それを糸でみな結わえて、枠を作つて、紙を張つて凧を作つた。そういうたものは、非常に作り方の上手な、お父さんとかおじいさんから、作り方を伝授されていたんだ。作り方の上手なガキ大将なんかもいた。』（中新田・70代）

『冬の苗代には水が張つて、天然のスケートリンク

クができていた。履き古して減った下駄の底に、「かすがい」っていう金物を打つてスケート靴を作つて滑つたね。』

『あと、竹下駄つていってね、竹を半分に切つて下駄をつくるわけだよ。当時は冬場になると馬ソリが堆肥を運ぶので、ソリが通つた跡を竹下駄で滑るんだよ。』（小野田・70代）

『私が小学校の頃は、家の庭にはドアなしの通路がずっと続いていた。「木戸」というんです。色々な家の木戸を自由に通つて、子ども達はどこにでも行けた。それがどこのうちの子供かも、地域の皆が知つていたから、怒られることもなかつたね。』（中新田・60代）

『子供の頃はある程度のいたずらは容認されていたね。ただ、絶対やつてはいけないことがあつた。皆の家にはお明神さまつてあるよね。あれを、子供の頃勝手に全部取つてしまつたんだよ。』（宮崎・60代）

『小学校に入る前や、小学校低学年の子供の頃の遊び場といえば、神社でした。昔は同級生がいっぱいだったので、神社の境内で野球などの遊びをしていましたね。』（中新田・60代）

『天気の良いときは、洞雲寺がたまり場になつて、みんなでわーわーと遊んでいた。洞雲寺を中心、「あつかんあつかん」やサバイバルゲームをした。』（宮崎・60代）

『中新田高校の裏のところが堤防になつているので、よくソリで遊びましたね。河川敷公園なので、桜が植わつっていました。草が生えているときは、段ボールに乗つかつて滑つていましたね。』（中新田・40代）

『小学校時代は、裏の川に行つてチャンバラをしたね。あと川の堤防にある伸び草に火をつけて燃やして、学生服で消したり。』（小野田・60代）

『小道具を使つた遊びには、地域によつて様々な呼び方があり、特に「めんこ」にはたくさん呼び名があつたようだ。

『ビー玉を当てたり、めんこ：この辺では「パンパンづき」とか「したんこ」と呼ばれてている遊びをした。他には「たが回し」といつて、自転車のリムを竹でくるくる回して遊んでいた。』（小野田・60代）

『春先と秋口はビー玉遊びをした。ビー玉をはじいて、それを当てて陣から出すとか、そういう遊びだった。あとは「ぱんぱん」って呼んでいた遊びだけれど、めんこで遊んだ。「ぴつた」とか、「パッタ」とか呼ばれるときもあったね。』

（小野田・60代）

『春先と秋口はビー玉遊びをした。ビー玉をはじいて、それを当てて陣から出すとか、そういう遊びだけれど、めんこで遊んだ。「ぴつた」とか、「パッタ」とか呼ばれるときもあったね。』

（宮崎・70代）

学校へ通う途中では、様々な楽しみがあつたようだ。通学路で寄り道をして道草を食い、学校に遅刻することもあった。冬は田んぼ一面に雪が積もつたので、田んぼの上をずっと進んでいく「ちゃんと渡り」で登校する子供も多かつた。

『今と比べると、道路も真っ直ぐではなくて、あちこち回り道をして通学した。いつもと別の道を通つてみたり、話をしてて遅くなつたりしたけれど、当時はそれが普通で気にならなかつた。』

『通学中、女の子は、小さい川へ行つたり、春にはシロツメクサを摘んで首飾りを作つたり、タンポポをとつてみたりしていた。』

（中新田・60代）

『山育ちなので、通学中も栗拾いなんかするんですけど。それで、学校には行かずに栗拾いだけして帰ってきて親に怒られた。また、色んな道草をして遊

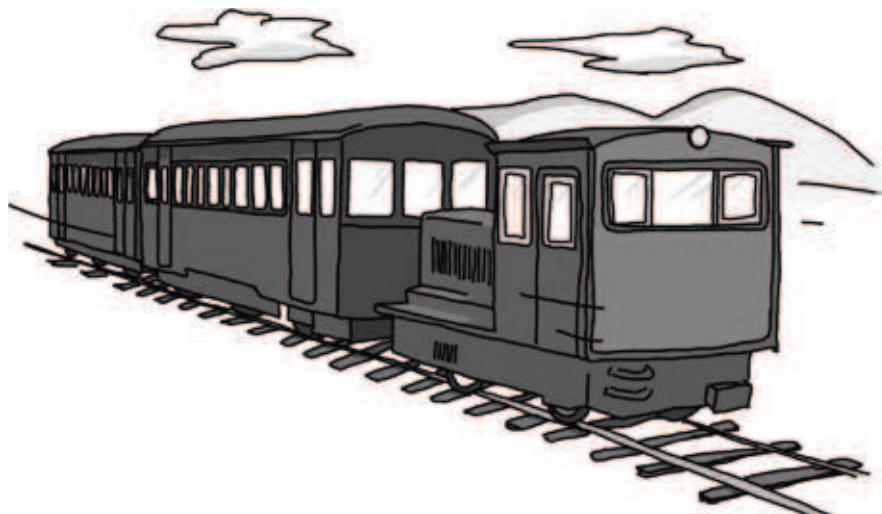
『昔はとにかく冷えて寒かつたんだ。冬だと、そこの辺の田んぼは全部凍つているから、自転車で渡れるんだ。道路じやないところや田んぼなどを通つて通学していたな。それを「ちゃんと渡り」って言うんだけど。ただ、帰りは自転車を押して行かなきやいけない。溶けるから（笑）。』

（宮崎・50代）

当時、長距離の交通手段は、馬車や軌道っこで吹雪の日には汽車が脱線し、学校に遅刻したことでもあつたという。中には自転車で通学していた子供もいたが、ほとんどは学校まで砂利道を歩いて登下校していたようだ。

『加美農業高校への通学は自転車だつた。でも冬は「軌道っこ」っていう汽車があつたんです。30分以上かかるて駅に着くんだけど、たまに汽車が滑つて田んぼの中で止まつちやうの。そして、2両編成のうち一両だけ、車両を切り離して先行つちやうの。私たちは「あれ、行つたべや、」って言つてあわてたよ。そういうことは何回かありましたね。この辺は、薬菜山のふきおろしで吹雪

んで、遅刻して立たせられたりもした。』



がすごいから。』（中新田・70代）

『家の近くの道には馬車が通るんですよ。その馬車が通った後は道がつるんになるんで、そこの上を滑つて遊んだ。あと、馬車の後ろにつかまって、引っ張ってもらつて遊んで、怒られたよ。』（中新田・60代）

『通学路は舗装道路ではなくて、砂利道だったの。その道を歩いて行つたのさ。6時に出て2時間半もかかるんだ。でも、みんなそうしてから不満ではなかつたな。中学校3年くらいになつて、バスができたんだ。』（小野田・70代）

みんなで集まつて勉強して遊んだり、上級生に教えてもらつたりと、子供たちは団結して活動していたようだ。また、吹雪のときは集団登校をしたり、冬の期間だけ通う「季節分校」があつたなど豪雪地帯の学校の様子が伺えた。

『夏休みには、一日みんなで集まつて宿題をして、後はもう全部遊んでた。宿題は上級生に教えてもらつたりもしたな。大きいお家に集まつてやつたね。』（小野田・60代）

『子供会という、勉強会みたいな集まりを、夏休みでは毎日のようにやっていた。ここから薬葉山まで行く時間も、学校に行くのと同じくらいで、歩いて15分くらい。道中で、家にない果物の木とかがあつたらそこから頂いてくるのさ。当時、子供はこの集落の同級生でも、男女あわせて20人くらいいた。』（小野田・60代）

（中新田・70代）

いをした人もいたんだ。ごはんに大豆を入れたり、大根の葉っぱを刻んで入れたりして、量を増やしていた。学校では、今みたいに給食なんてなかつたから、みんな弁当だったね。昔のアルミの弁当には、フタに梅干しが必ずついてたもんだから、酸化して穴が空いていたよねえ。』

『私たちの一日のお小遣いは、3銭でしたね。でも、あんぱんは1個5銭したから、それでは食べられなかつたよ。』（中新田・70代）

『冬には、雪が今よりも2倍か3倍くらい降ったので、みんなで一列になり、中学3年の人気が先頭に立つて集団登校をした。』  
『1年生から3年生までは季節分校といって、冬期間だけ分校に通っていました。勉強と言つてもね、していたのは作文とかお絵かきとか、紙芝居。私たちの時代は、ほとんど遊んでいる状態でしたね。』（宮崎・70代）

『小学生2年生から給食があり、近所のおばちゃんたちが3人で作っていたので、田舎料理だったな。脱脂粉乳はみんな嫌いで、残していた。パンだって、みんな食べなかつたんだな。』（宮崎・50代）

戦後は食糧不足で給食もなく、大変だった。次第に小学校で脱脂粉乳やパンなどの給食が出るようになるが、食べられない子供が多かつたようだ。中学になるとお弁当か購買部でパンを買って食べていた。給食やお弁当に関する当時ならではのお話が伺えた。

『子供たちのなかには、食い物がなくて苦しい思

落ち穂拾いやイナゴ捕りは農村地帯での生活と連して、学校でも学習の一貫とされていたという。

『昔は落ち穂拾いというのがあった。田んぼを全部刈った後に、穂が落ちてるわけよ。それを学校で集めて、売ったお金でボールを買つたりしたね。俺たちはいかにして多く捕るかを考えて、ねずみの巣穴を探したよ。一つ見つければいっぱい集まる訳だから。』

『イナゴ捕りでは、自転車に網をつけて捕つたね。今日はイナゴ捕りの日つていうのが決まつて、月曜のお昼ぐらいまでに捕つてきて下さい』って頼まれた。それを学校に集めて、業者が買いにくる訳だ。業者たちはこちらへんで集めたイナゴを買って、山形に持ち帰つていた。』

(中新田・70代)

『落ち穂拾いは昔からあつたね。昔は手と鎌を使つて穂を取つて、田んぼで乾燥させるわけですね。そうすると穂が田んぼに落ちるから、子供たちがそれを学校に行きながら拾つていく訳ですね。重さがいくつあるか測つて、多いと自慢になるですね。表彰もあつた気がするな。』

(中新田・60代)

『我々が小さい頃には、イナゴ取りが学習の一環としてあつたからね。昭和30年代だと、それを捕つて売つて学校で資源にしてたのね。イナゴは害虫になるから、その活動は農村地帯にとつては一石二鳥だったのね。我が家でもイナゴを取つて、佃煮を作つて食べました。』(小野田・60代)

『昔はよくイナゴを捕つて、佃煮にしましたよ。あぜ道を走るとばーっとカゴに入つてくるんです。』(中新田・60代)



親にお使いを頼まれた子供たちが商店街を回る様子は、まちの明るい雰囲気を作っていたことだろう。

『親が外に出られない時には5円とか10円をお遣いとして貰つて、お肉屋さんやお魚屋さんに買い物に行かせられましたね。』

『昔はスーパー行くとパックで売つてあるような

ものではなくて、その日に作ったものを買つてき

て食べるのが普通でしたね。だから豆腐屋さんに朝行くと、一生懸命豆腐屋さんで豆腐作つて見るのを見るのも楽しみだったね。昔は手作業だからね。』（中新田・70代）

当時は洪水でよく橋が流された。そのため川に渡し場がいくつかあり、渡し舟を使って川を渡つていたようだ。

『洪水のときは、船がないと渡れなくなるところもあつた。昭和37、8年くらいまでは舟が通つてたかな：舟着き場もあつた。』（中新田・60代）

『今から50年前の田川は、洪水でしょっちゅう橋が壊れたね。うちしか舟を持っていなかつたので、その時は対岸まで小学生を送り届けていた。』

いわゆる渡し舟だね。』（宮崎・70代）  
水道が完備されていない時代だったため、湧き水や井戸水が生活用水として重宝されていた。水はとても綺麗で、飲み水やお風呂など上流から下流まで様々な使われ方をしていました。また、井戸は単なる汲み場としてだけではなく、世間話の場になっていた。

『家の近くに井戸があつて、そこの水をみんなで使つていたんです。今は水道が入つていますが、以前はポンプで、みんな順番に水を汲んでいた。それをお風呂に使つたり、洗濯にも使います。戸端会議もよくしましたね。今から50年くらい前の話です。』（中新田・70代）

私が小学校3年生の頃までは、湧き水を使つていたの。飲み水にもしても良い水だつたんだ。池があつて、そこでご飯の釜や鍋を洗つた。その池では鯉も飼つてゐるわけさ。水が綺麗な上流には、鉄魚がいたらしいんだ。』  
『お風呂の水は暗くなつてから汲みに行くんだけど、家までバケツで運んで、いざお風呂に入つたらぬるぬるするんだ。それで、明るいところで見てみたら蛙のなさ（笑）。』（宮崎・50代）



『沢の湧き水を、タンクみたいのを作つて貯めていた。竹を半分に切つて、節をとつて繋いで、水が流れるようにして使つていた。「水屋」：今まで言う台所に、そうやつて常に水が流れる道を作つたよ。雨が降ると真っ黒になるけど、それも

飲んでいたけどね。昭和43年ぐらいまでやつたけれど、その後井戸を掘つたんだ。』  
(宮崎・70代)

『お風呂は、昭和30年代後半までは全部薪だつたので、火を焚いていましたね。私の家の辺りでは、昭和が終わるぎりぎりまで薪を使つていた家もあります。』(宮崎・60代)

日本経済が急成長し、テレビなどが普及し始める  
と、少しずつ新しい生活へと変わつていった。炭火  
を使つた七輪から、徐々に石油ストーブへと需要が  
変化していき、洗濯機も誕生した。また、茅葺き屋  
根は職人の減少、維持管理の大変さを理由にトタン  
に張り替えられ、まちなみも変わり始める。

『この頃は三種の神器の時代だつた。お金持ちの  
家にテレビを見に集まつた。』(中新田・50代)

『昭和36年ぐらいにラジオが普及した。そして  
オリコンピック後はアンテナが立つてテレビが見れ  
るようになつたね。同時に入つたのが、電気洗濯  
機。それまで木の桶の鉄砲風呂でしたから、そこ  
に薪を入れて沸かしていたね。手間はかかるけど  
暖かつた。』(宮崎・60代)



『私は、七輪を使っていた時代から石油になつてガスになつて、電気釜になつてという行程を全部見てきたの。昔はいつも炭で火をおこして七輪に入つていて、こたつの中には炭か練炭が必ず入つてそこにお湯が沸いていたの。』

『夕飯で残つたご飯は全部おにぎりにして、そして朝七輪の上に網を渡してご飯を焼いて、朝起きたらみんなそれぞれ忙しいのでそのおにぎりを食べるつていうのが習慣でした。ちょっとお焦げの匂いがしたね。』（小野田・60代）

『私の家は明治36年に建つたらしい。昔は茅葺き屋根だつたんだよ。昭和40年くらいに、茅の手入れが大変だから、トタンにした。昭和50年代には瓦にしました。トタンの上に、そのまま瓦を乗つけたんだ。』

（中新田・60代）

当時は頻繁にご近所付き合いがあつた。各行政区の神社でお祭りをして酒を飲んだり、契約講で集落の人達と助け合うなど、地域における「ミニユーティ」が活発だったようだ。

『近所のお婆さんがいて、餅を持つて行つて、お茶とかもらつて話したんよね。昔は近所の付き合

いは頻繁だった、近所のことは何でも知っているよ。』（宮崎・60代）

『各行政区に神社が必ずあって、年に1回お祭り

をして、酒を飲んで、維持管理なんかもやつていたんだ。そこに糸があつたし、「契約講」も昔はあつた。』

『契約講』というのは、誰かが亡くなつた時に、親類や集落の人間に知らせて、棺桶を入れる穴を掘つたりする、「互助の精神」だ。他には火事の時に助け合つたりしたんだよ。』（小野田・80代）

『契約講で同じような、食器をお互いに貸し借りして使つていたんだよ。座布団も同じようなもの用意していたからそれを貸し合つていたんだ。』（中新田・70代）

『祭りのときには、親父たちは神社で櫓を作り、発表会をしてたな。青年会といつて、昔は活発だった。年代の若い人たちが、神社で色んな催しをしたんだ。コミュニケーションの場所だつたんだね。』（小野田・60代）

『子供がたくさんいた頃は、この旭小学校の学区

内で、行政区が8つあつたんですよ。行政区対抗運動会の時には、しょっちゅう練習をやって、神社に行つてお参りしたり、はちまき巻いて真剣だつた。』（宮崎・60代）

## 昭和後期（1970～80年代）

### 機械化による生活の大きな変化

昭和後期は、以前から見られていた生活用品の機械化が本格化してくる。一方で、昔から続いている学校行事もあり、新しいものと伝統的なものとが混在している時代であつたと言える。集落で助け合いをする「結」も、時代の変化と共に内容が変わっていった。農業は、手作業から機械化への転換期で、機械化によつて農作業が楽になつた一方で、地域の人との関わりが薄くなつたという意見もあつた。

『物心ついた頃は、稲作は全部手作業だつたから、忙しい時期になると色々な人を周りから集めた。朝起きると、家の土間にテーブルを置いて、知らない人が朝ご飯食べていたこともあつたぐらい。』  
『結』つていつて、労働の助け合いもあつた。だけど俺が中学校のときは、もう田植機やコンバインが導入されたんだ。』（中新田・50代）

『稻刈りは、昔だと刈つてから乾燥して脱穀するのに、半月から1ヶ月くらいかかったんじやないかな。今は機械があるから早くなつて、その代わり共同作業は少なくなつた。』（中新田・70代）

『農作業に機械が導入されると、自分の家だけで処理できることになつたね。一番良いのは、皆で共同作業のお願いをしなくてもいいって事ですね。「ここ終わらせてからご飯だから」とか、「今日は休み無しで」「終わりが少々遅くなるけど、ここまで皆でやつてしまおう」とか、共同作業にはノルマがあつて厳しかつた。両親が言うにはノルマは1人1日1反。終わる頃にはもう氷が張つていた。』（中新田・60代）

子供会の活動や遊びは活発であつたようだ。冬の雪遊びも変わらずに盛んで、子供たちはソリやスケートで遊んでいた。特に田んぼは子供たちにとって、年中遊び場所となつていたようだ。

『子供会があつてね。上級生の家だつたり、集会所などで活動をしていた。昔はそれを子供が自主的にやつていて、親は1年に1回手配をしてくれるくらいだつた。』（中新田・70代）

『今みたいに休みの度にどこかへ行つたりはできなかつたので、この辺で探検ごっこなどをして遊んでいました。夏だつたら、すぐ裏の川で泳いだり。』（宮崎・30代）

『田んぼに氷が張つてあるときは、下駄に竹を貼つて作ったスケート靴で遊んだ。金持ちはスケート靴を持っていたかもしぬないけど。冬は竹やソリを使って遊んだ。』（小野田・60代）

『よく藁で遊んだね。中学生の時は体操部だつたので、マット代わりに、藁をクッショントとして使いました。学校のマットは薄つべらくて、技の練習ができるなかつたけれど、田んぼではいろんな技が練習できたの。』（中新田・50代）

『この時代でもイナゴ捕りはよく行われていたようだ。イナゴを売つたお金で図書室の本を買う「イナゴ文庫」や、「イナゴ捕りの日」など、制度的に生活へ組み込まれていたという。』

『イナゴは割当（ノルマ）があつて、小学1年生は1人100g、6年生は600gという具合だつた。中学生になると1kgになる。捕まえたイナゴを資金にしてピアノなどの備品を買つた。イナゴは動きが速いから、捕るのが難しい。だから、朝早くイナゴが動かないうちに獲るなど工夫をした。生きたまま、スレーパーの袋とかに詰めて。』（中新田・40代）

（中新田・40代）

（中新田・40代）

『昔の中新田では、中学生はイナゴを捕つてきてそれを業者さんに売つて、その収益で図書室の本を買うので、イナゴ文庫つていうのがあつたよ。』

『イナゴ捕りには、1～3位までは何らかの賞品が出るんだよね。手ぬぐいで縫つた袋を使つて、中でイナゴが呼吸できるようにして、その袋の中にイナゴをぐしゃぐしゃに詰めるんだ。学校では目標が1kgつて決まつてゐるから、もし重さが足りなかつたら、霧吹くのよ。そうすると布が水を吸つて重くなるしょ？それでごまかしていたわね（笑）。』（宮崎・50代）

（宮崎・50代）

『當時は、生活のインフラが整備されようとしている加美町の転換期であつた。舗装前と舗装後で風景は大きく変化し、整備されたことで生活圏も変わつていつたようだ。』

『僕たちが小さい頃は、やっぱり大抵のことは地元でしていたよ。買い物などもすべて。川も當時は綺麗でよかつた。』（中新田・30代）

『鹿島神社の周りは、昔は建物が無くて全部田んぼだつたんだ。だから、私の家からずつと遠くの神社までが見渡せた。それだけ何もなかつたといふことです。』（中新田・60代）

『確実に違うのは道路の幅が広くなつたことだ。この中心街は、かつて主要の幹線で今よりも交通量が多かつたと思うけれど、砂利道で舗装はなかつた。今より子供も多かつたし、危ない通りだつたのだろう。』（中新田・70代）

『宮崎町内は耕地整理などによつて県道も町道も農道も田んぼ整理されたが、昭和50年以降までは曲りくねつた道路だつた。』（宮崎・70代）

『道路が舗装されたのは大きくて、私たちが子供のころに見てきた風景と、今の子供たちが見ている風景は違うと思うんだよ。私たちが子供の頃は、生活範囲がものすごく狭かつたから、今みたく休みの度に親がどこか連れていくことは無かつた。』（宮崎・30代）

食べ物の物々交換が行わっていた一方で、釜戸での生活から炊飯器に変わると、機械が普及し日常生活は変化していく。

『鍋を持って油揚げと豆腐を買いにいって、向かいの農家さんに食事の残飯を持っていって、代わりに鶏の玉子を貰つたんです。』

『学生ラーメンは60円で、パンは1個20円でした。小遣いは50~10円台。家に帰つたらランドセルを置いて、紙芝居を見に行つたりして。』  
(中新田・50代)

『家の釜戸がなくなつたのは、ちょうど茅葺き屋根をやめた昭和50年代です。このころから、保温ジャーも使い始めて、煙で家中が真っ黒になりました。』  
(中新田・60代)

『昔は薪で生活していて、自給自足でお金が要らないような生活でした。薪は枝と幹を分けて、大きい幹はお風呂用です。杉の葉は、主にご飯を炊くのに使っていました。』  
『年に1、2回「山座」というのがあって、みんなが共同で持っている山に、朝から一日かけて焚き物にする木を切り出しています。それを等分に分けて、若い者が運んでいます。』  
(中新田・60代)

『冬はだるまストーブを使つていた。そこに杉しばを入れて、木を蒔いて、火種を作る。長さ30センチ直径15センチくらいの薪を、学生は一人3把とか5把作つて持つて行くんだ。小さい不出来なのもあれば、おじいさんおばあさんにつくつてもらつた綺麗なものもあつたね。』  
(宮崎・50代)

薪を使って生活していた当時は、みんなで木を切つて配分する「山座」という制度があった。当時は薪を生活に利用していて、自給自足でお金が掛からない生活だった。小学校にはダルマストーブがあ

り、小学生は皆、薪を作つて持つて行つていた。また、当時井戸はたくさんあつたが、枯れてしまい徐々になくなつていった。しかし、この頃にはすでに水道も通つていたので、井戸の必要性は薄れていったようだ。

『井戸は、2世帯で1つでしたね。井戸の数も多かった。今も残つてゐるところもありますが、昭

和50年代くらいには水位が下がって枯れたんですね。井戸の跡は今でも残っていますよ。』  
（中新田・60代）

家の間取りも違っていたようだ。それは当時の生活の仕方を反映しているのだろう。また、茅葺き屋根については、職人や茅の減少により、どんどん少なくなつていった。

『昔は田の字型した部屋（廊下が無く、大部屋を襖で仕切るかたちの間取り）になつていたんだよ。30年くらい前までは、人を呼んだりして大人数集まる機会も多かつたから、そういうときは敷居を取つ払つて広い部屋にしていたんだよ。今の間取りになつてしまつているのは、それだけ部落で集まる機会が少なくなつていつているという事なのかな。集会所もあるから、必要がなくなつたのかもしれないね。』（小野田・60代）

『昔は茅葺きでしたね。火事になつて皆焼けてしまつてから、トタンの屋根に直したんだ。今は茅葺きの職人もいなくなつたし、茅もない。』  
（中新田・60代）

商工会や西美会は現在よりも会員が多く、当時か

ら活動が盛んだったことが伺える。団体の活動が発化する一方で、契約講は薄れ、近所付き合いも希薄になった。

『西美会っていう会があるんです。西町の美人の会。そこで、平成24年には「絆の元気お雑煮鍋」という活動をやりました。』（中新田・70代）

『商工会青年部では「町をどうしていくか」というのを話し合つていて、まちのイベントの中心でした。昔は会員が60人くらい、実働は20人くらいでした。今は全員で20人くらいだから、実働は数人でしょう。』（中新田・50代）

『契約講』って言つて、人が亡くなつたらその部落の中で役割を決めて葬式をしてたの。また、昔は嫁さんをもらうとみんなでお祝いしに行つたりもした。』（小野田・60代）

## 平成（1990年代）

地域コミュニティの希薄化と、まちの活性化に向けて

平成になると、農業の後継者問題が深刻化し始め

また、イオンやヨークベニマルといった大手スーパーが進出し、商店街の衰退が目立ってきた。

『今は家を継ぐ人もいませんし、いても農業を継がない場合が多いです。今の若い人たちは、体を動かす機会がありませんよね。私たちは体を動かして汗をかくのが好きですので、運動が足りない時はプールに行ったりもしますが、若者は農業が出来ない体になりつつあるような気がします。』

(中新田・60代)

『組合マートやエンドーチェーンでは、衣料品から食料品まで売っていたよ。最近になつてイオンやヨークベニマルができると、みんなここがいいって言う。街がどんどん崩れていつたのは、規制緩和が敷かれてからだ。どの街も変わらなくなつた。』(中新田・60代)

『昔と比べて中新田の風景は、ものすごく変わったね。昔来たときには人がたくさんいた。商店街も栄えていたし、すごく賑やかだったね。昔が懐かしいよ。今は大型店舗があるでしょ。イオンとヨークベニマル。みんなそつちに流れていっちゃうからね。やっぱりそれが一番の原因だね。』

(中新田・60代)

『商店街がにぎやかになるのは、4月29日の虎舞のときだけだよ。その時は大体3万4千から5万人集まるからね。仙台をはじめ全国から人が来るでしょ。もう身動きができなくなる人が集まる。でも、それ以外の日は全く人がいないよ。』

川や神社、町中で子供が遊んでいる姿を見なくなつた。広場で遊ぶ子供の姿はなく、むしろお年寄りがグランドゴルフやゲートボールで遊んでいるのである。

『薬菜神社には地元の人はお参りに来ますけれど、昔のように子供が遊ぶことはないね。昔は川に魚を捕りに行つていた。だいたい、最近は子供が川で遊んでいる姿も見ない。熊なども恐いからね。』

(小野田・60代)

『広場と言ふと、役所の跡地があるけれど、子供が遊ぶ姿は見ないです。代わりにお年寄りが、グランドゴルフやゲートボールとかをして遊んでいるよ。今では、どこの子供もあまり外で遊ばないね。東京に住んでる孫が帰つてくると、絶対遊びをするね。自分の畠のスイカでスイカ割りもして遊んでいるよ。』(小野田・60代)

近代化に伴つてまちなみは大きく変化した。昭和

期に見られた茅葺き屋根の衰退のほかに、中新田では土蔵造りなど伝統的な造りの建物も保存されることがなく、近代化の波に埋もれていった。また、圃場整備などは隨時行われ、道も広くなり風景は随分と変わったようだ。

『茅葺きの家は、20年前にずいぶん減りました。職人の前に茅を確保するのが大変だったから。加えてコストがかかる。茅は一気に直すのが大変だから、毎年直していくかなきやいけないの。それで、茅葺き屋根をそのままにして、その上からトタンをかけた家がある。ただ、茅葺きの屋根の家に住むのは最高なさ。夏は涼しい、冬はあたたかい。エアコンなんていらないから。茅の厚みはすごいからさ。』（宮崎・50代）

『まちなみで言うならば、昔は土蔵造りがたくさんありました。今は田中酒造の1軒だけしかない。昔はこの辺で火事がしばしばあつたものですから、防火という点でも、あの造りが多かつたんですね。この町では残念ながら、保存しないままに、一時期の商店街の近代化という名のもとに店舗を改造して、その表面を新しく覆つてしまつ

様々なところで生活の変化が見られたが、バツハホールの使われ方も、今とは違つていたようだ。

『僕らが小学生の頃は、バツハホールの中に普通に入れて、もつと馴染みやすかつたんですよ。だから、どこに行つても中新田はバツハホールの町という感じがあつた。』（中新田・30代）

『当時の行政は、箱もの主体の時代だった。そのころ様々な建物が建つたので、東京で会社の先輩に、バツハホールの記事を見せられたくらい有名にはなつた。ただ、今では維持管理費が高いといふ問題がある。』（中新田・50代）

『お墓参りなどの風習も大きく変わつていつた。

た。私は、土蔵造りの町並みが落ち着く感じがします。』（中新田・70代）

『この辺りは、車と人の擦れ違いが大変な道路だつた。田んぼの圃場整備をやる関係で、こんな立派になつた。そして川に蓋をして、うちの土地も提供して、道路を広くしました。』（中新田・70代）

『お墓参りして先祖様を迎えるために、家で「盆

棚」を作るんだ。竹で作って、昆布とかそうめん、リンゴ、ほうじき、茄子などを用意して、終わったら川さ流すんだよ。今は川が汚くなるから、竹を短く切って、束ねてゴミを出してるんです。』（小野田・70代）

昔の様子が失われていく中で、山菜の匂や薬草の効能など、昔の暮らしの中の知恵を現代に伝えたいという声もあった。

『我々が子供たちに一番伝えたいのは、どんな山菜が食べられるか、どんなものを昔は食べていたんだとかだよ。それから旬の時期や、昔に食べられていた、いろいろなもの、薬草に使っていたものなどを伝えたい。』（小野田・60代）

伝統的な行事だけでなく、スポーツ大会やべごっこ祭りなどの新しいイベントが増え始める。さらに、婦人会や若妻会などの団体や「コミュニティ」による、地域のイベントも増えてきたようだ。また、地域の寄り合いの場所である集会所は地域で管理し、団結して町の活性化に力を注いでいる。

『私の部落では、冬に「切込の裸力セドリ」、「へソビつけ」というお祭りがある。この辺りの地域

は水が無いのに、昔大火事があった。へソビがつくりそれが燃えたら危ないということで、祭りが始まつたと思うんだ。毎年旧暦の2月の15日にやるんだ。今は炭を使っているけれど、昔はずっと酒で練つた「へソビ」を顔に塗つて、裸で各家に回つたよ。そして、各家庭でごちそうしてもらうんだ。夕方七時ぐらいから夜中まで、昔は雪の中、裸足で回つたというんだ。近くに塩湯というのがあって、終わつたらそこで体を洗つて、宴会をするんだ。昔は有名だったんだ。』（宮崎・70代）

『スポーツ少年団も、いろいろ活動しているよ。また、ドラゴンカヌー大会というものが開かれるんだ。昔は鳴瀬川で魚釣りもできたんだけど、普段はあまり人が集まらないんだ。』（中新田・60代）

『8月は七夕祭りがあつたけど、今はないね。どこの集落でも盆踊りをやつていてるよ。あとは、秋祭りといつて、農家のいろんな農産物、野菜・米などを出展して、品質で一等賞、金賞を競うものがある。今は加美町全体でやつてているんだ。』（宮崎・60代）

『15年くらい前に町長なった人がお祭り好きな人で、春夏秋冬お祭りしましようって人だった。

とか、春夏秋冬ある行事の際に披露しています。』

(中新田・60代)

春は5月4日に春祭り、夏は夏祭り。でも、この地域でだんだん七夕祭りをやらなくなってきたから花火をあげてたの。』

『秋祭りは文化祭とか、「べごっこ祭り」っていうのがある。牛をね、焼いて食べる。前は1匹まるまる焼いてた。べごっこ祭りは山の斜面でやつてるんだよ。20年前くらいに始まつたのかな。地場産品のものを食べましょっていう。』

(小野田・60代)

『加美よつばの農業祭というのもあるんです。色麻や、小野田、宮崎の農協をまわって、色んな野菜の展示をして賞をもらうの。』(中新田・70代)

『2月の蔵開きに、鍋祭りがある。そこではただ酒が飲めて、鍋も20～30種類は出る。2月の初め頃だから、そこまで雪はないけど、やつぱり寒い。そんなときはモツ鍋がおいしいんだ。』  
(中新田・60代)

『ふるさと音楽会というのが10年続いている、今は子供達がやっています。町中で音楽を演奏したこともありますし、夏祭りの縄文太鼓とか虎舞

『交通安全教室というのも家の前でやつていた。他の活動としては、この近くで保護者会のスポーツ大会も行われている。この辺はすぐ何かあるとスポーツ大会をするんだ。今も行政区対抗とかが続いているんだけど、今ではそんなに人は集まらないね。』(宮崎・30代)

『「若妻会」というものが各地区にできたの。今までは、子供が生まれても同じくらいの世代の女性と知り合うきっかけがなかつたから、家で家族と過ごすしかなかつたの。若妻会では、基本的に嫁さんたちのおしゃべり(笑)。教養とか、料理教室とかしていたね。』(宮崎・40代)

『中新田には、婦人会の会員が170名いて、第一水曜日のほかに月1回、何か行事を行つています。春はお花見とか、健康体操、勉強して落語をしたり、サーカスして見せたり、マジシャンをしてみせたりしました。先生をお呼びして色々な講演会や、みんなで日本舞踊の練習をしたり、お祭りにフリーマーケットも行いました。』  
(中新田・70代)

『お花見のときは、スポーツ公園に行きます。あゆの里公園では、秋口にグランドゴルフをするんです。』（中新田・70代）

『集会所は、昼間は子供会、夜は若草会などが使っているよ。地域の方が集まるとなると、ここを使っています。この周辺の中心みたいな場所だけど、管理も面倒で、年に3回集落で草刈りをしている。』（宮崎・70代）

しかし、近代化が進むにつれて、人と人とのつながり方も変わつていき、結や契約講などは名ばかりとなつてしまつた。契約講が働くのも今では葬式の時くらいで、昔のような絆はないようである。そんな中で、古き良き習慣を復活させようという動きもあるようだ。

『昔はじいさんばあさん達と同居している世帯が多く、挨拶をはじめマナーの教育があつて、地域のコミュニティがしつかりしていた。みんなが自分たちの子供みたいな感じで育てられた。』（中新田・30代）

『近所の人たちに、手組つていうのがあつたの。何かあつたら手伝つてもらつたり、お返しに手

伝つてあげたりする。でも、世代が変わつてくると昔からの伝統も薄れていきちゃうからね。近所付き合いも希薄になつてくるね。』（小野田・70代）

『最近は結が全然ないんだよ。機械の共有ぐらいはあるけどね。若い人がいなくて、本当に困つているね。』（中新田・70代）

『結つていうのは、お互いが大変なことをみんなでやることで、重労働から精神的な開放を得るっていうのが一番だつたんじやないかな。単なる労働力の提供だけじゃなくて、いろいろな相互扶助を含んでいるのが結だから、お互いに喧嘩をしていても何かあれば助け合うのが、こういう農村社会で大事だつたんじやないか。』（中新田・50代）

『人付き合いは薄れてきてるね。昔は隣近所とのつながりを維持するための「講」というものがたくさんあつて、信仰と同時に相互扶助が行わっていた。家族の人たちだけで、何もかもできるわけじゃないからね。この町の横のつながりを維持するための役割をしていましたが、今はもう完全になくなりましたね。』（中新田・70代）

で、4団体ある。ただ、今はもう親睦会になつて、年に一回総会をするだけになつた。昔はみんな集まつてお酒飲んだり会話したりするのが楽しかつたんだよ。昔は家を新築するときだつて、前の古い家を倒さなきやいけない誤だから、必ず手伝いにいった。苦しい仕事があつたときはみんなで助け合つてたんだな。今はそういうこともなくて、新築でも契約講に頼らないから、今は葬式くらい。

「契約講」ってあっても名前だけだね。』

(小野田・60代)

『契約講は今でもあるけれど、念佛講というか、今では冠婚葬祭だけしか扱わない。』

(宮崎・50代)

『人との付き合いは不幸の際の手伝いぐらいだ。今は葬儀屋さんがやつてくれるから、これもいざれ無くなるのかな。親父に聞くと、昔はもつともつと厳しかつたらしい。何十人も集まつて、餅をついたね。今はお金を出せば葬儀屋がやつてくれる。』(中新田・70代)

『震災で電気は止まつたけど、水とガスは使えたし、お米は各家庭で作つてるので特別食べる物が無いわけではなかつた。この地域の方には、自分の店の在庫を全部出して提供した。お客様が

『震災をきっかけとした助け合いには、例えば米の話がある。精米している家の人が、そうでない人の家に持つて行くことがあつたみたいだよ。昔は何かあつたらみんなで助け合つていた。』

(中新田・70代)

『「結」の制度は堅かつたし、厳しかつたよ。道路の補修にしても、自分たちで労力奉仕をして、そして自分たちの生活道路を守るんだよね。当時は

各世帯から作業に参加して、集落の全世帯が參加した。娛樂も兼ねながら、集落の絆を守つていたよ。今は隣のうちのことも分からなく、生活の様子も個々でばらばらだ。それで「結」の作業がなくなつてしまつた。そのために、農村を守ろうという保全関係の補助金を出して、「結」を最終目標として活動している。』(小野田・60代)

人と人の関係が薄れてきている様子は様々な状況で見られたが、東日本大震災ではその連帯意識が直されることとなつた。

『ここは地震のときは大変だったけれど、米とか食べ物には困らなかつた。農家の方が多いし、ほとんどの方は袋で一年分買いますから。ガスはプロパンだし、水もすぐに出ましたしね。ただ、電気だけがだめだつた。』（中新田・60代）

『この間の震災の時は、昭和に戻つたみたいだつた。みんなが、ガソリンがないから自転車で町の中を走つた。町に人がいっぱい歩いてるから、知らない人でも、「大丈夫か」と声をかけあつた。近所の顔が見えた。』（小野田・60代）



ここまで「加美町の暮らし」として様々なエピソードを見てきた。時代を追つてみると、昭和前期までは自然環境との積極的なかかわりの中で得られる食料や、生活と遊びが一体的に行われてきた様子が見て取れた。

戦後、高度経済成長期である昭和中期は、まさに時代の移り変わりが加美町に大きな転換期をもたらした。昭和後期は、それまでの激動の時代から落ち着きを取り戻し、生活水準が一定に達したとともに、バッハホールなどの公共施設が充実してまちの風景も一変した。平成に入り近代化がより一層進むにつれて、人と人の関わり方が少しずつ変わり始め、整備されてなくなつた場所や、昔の共同体のあり方や習慣を懐かしむ声が多く聞かれた。そのような共同体のあり方は、震災を通して改めて問い合わせされ、考えさせられるきっかけとなつたと感じる人も少なくないようだ。

以上が「加美町の暮らし」としてまとめられる。